

前の御汁をもてまいる、公卿にも汁をたぶ、御はし下ル、内侍御かへをもて参る、公卿にもたぶ、藏人すゞの鉢に入でもていつ、公卿給りて、御盃まいる、女中とをりて後、藏人酌にて、公卿に座ながら、殿上人は公卿の座の末に而召出してたぶ、其後公卿の座のうしろに候ズ、三こん御ひらは第一の上膳の酌也、女中の座をいざり出て、女中公卿以下召出て、御とほりをたぶ、四こんへくしありは、次の上膳の酌なり、勿論御前の御陪せんは、とほしの様前におなじ、五こん鳥は、天酌なり、六こんうりを供すれば、公卿侍臣ニもうりたぶ、みな月のごとし、御箸くだりて後、各給はる、此度は又次の典侍の酌なり、もし上膳分の人不足の時、勾當内侍人数にくは、るなり、七こんひとつを供じて後、五すへを供ズ、御右の方のはしにあり、此度は公卿の酌也、第一第二をいはず、公卿の中可然人也、女中は座ながら、男はめし出さる、酌の人の手前は、次の人酌に替る也、常の事也、天酌の頃より、うたひなどうたひて、公卿の座のまへに、かはらけのもの二つ出ル也、天酌の後、公卿たがひにとりてあたふ、事はて、入御、みな月に同じ、

〔御湯殿の上の日記〕明應四年七月六日、御めでた御さか月、二宮の御かた、三宮の御かた、おかどの御ふた御所ほうあん寺殿大玄やう寺どの御ふた御所、あんせん寺どのよりも、御まいりなけれども、御さかな三色、一かまいる、のこり御所々々よりは、ながはしへ、御申どもありし、ふたゆふめして、うたはせらる、御さかつきの御かず八こん参る、十日、めでた御さか月参る、宮の御かた、ふしみどの、御むろくわじゆ寺の宮はしむんの御かつまき御所も、御参りあり、おり五かう御たる二かまいる、ふしみ殿より、御かわらけの物三色、一かまいる、くろどにて九こん参る、三こんに宮の御かた玄やく、五こんに、ふしみどの、六こんに、御かつしき御所ばかりまいらる、七こんに、てん玄やくことくくくにたぶ、御ともに六らう、よしらうなど参る、めしてうたわせらる、御ひしひしとめでたしく、十三日、玄もかはら殿より、めでた御さか月まいらせらる、御いはる